

令和元年度(7月~9月) 日程表		S c h e d u l e																													
2019 7	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	13日	14日	15日	16日	17日	18日	19日	20日	21日	22日	23日	24日	25日	26日	27日	28日	29日	30日	31日
	普通展示 (浮世絵) 尾形月耕の美人画 (7/9~8/4)																														
	普通展示 (東洋陶磁) 面取りのかたち (7/9~10/14)																														
	普通展示 (陶芸) 恒久破壊 十三代三輪休雪(三輪和彦)の陶造形 (7/9~11/17)																														
	普通展示 (工芸) 山口県と伝統工芸1 一漆工・染色・和紙一 (7/9~9/8)																														
	特選鑑賞室 喜多川歌麿 難波屋おきた (7/9~7/31)																														
	茶室 桑田卓郎 Dear Tea Bowl, Horsetails are in season in Hagi. (~2020/3/15)																														
	特別展示 The 備前 一土と炎から生まれる造形美一 (7/13~9/1)																														
8	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	13日	14日	15日	16日	17日	18日	19日	20日	21日	22日	23日	24日	25日	26日	27日	28日	29日	30日	31日
	※1 普通展示 (浮世絵) 水野年方 (8/6~9/8)																														
	普通展示 (東洋陶磁) 面取りのかたち (~10/14)																														
	普通展示 (陶芸) 恒久破壊 十三代三輪休雪(三輪和彦)の陶造形 (~11/17)																														
	普通展示 (工芸) 山口県と伝統工芸1 一漆工・染色・和紙一 (~9/8)																														
	特選鑑賞室 東洲斎写楽 三世市川高麗蔵の志賀大七 (8/1~8/31)																														
	茶室 桑田卓郎 Dear Tea Bowl, Horsetails are in season in Hagi. (~2020/3/15)																														
	特別展示 The 備前 一土と炎から生まれる造形美一 (~9/1)																														
9	1日	2日	3日	4日	5日	6日	7日	8日	9日	10日	11日	12日	13日	14日	15日	16日	17日	18日	19日	20日	21日	22日	23日	24日	25日	26日	27日	28日	29日	30日	
	普通展示 (浮世絵) 水野年方 (~9/8)																														
	普通展示 (東洋陶磁) 面取りのかたち (~10/14)																														
	普通展示 (陶芸) 恒久破壊 十三代三輪休雪(三輪和彦)の陶造形 (~11/17)																														
	※2 普通展示 (工芸) 山口県と伝統工芸2 一陶磁・硯・金工一 (9/14~11/17)																														
	特選鑑賞室 歌川広重 木曾海道六十九次之内 宮ノ越 (9/1~9/29)																														
	茶室 桑田卓郎 Dear Tea Bowl, Horsetails are in season in Hagi. (~2020/3/15)																														
	特別展示 にゃんとも猫だらけ (9/14~11/17)																														

- ★イベント**
 アート・フェスティバル2019
 子どもから大人まで楽しめるステージやワークショップなどイベントが盛りだくさん!
 日時●8月11日[日・祝] 9:00~16:30
 鑑賞バスツアー (詳細はP3へ)
 山口市を発着、萩焼・深川の里(長門市)の古窯と窯元を学芸員と巡回展覧会を鑑賞します
 開催日●8月17日[土]
 参加費●一般3,000円 [メンバーズ会員2,500円] (昼食代含む、観覧料別途)
 定員●23名 [最小催行人数: 5名]
- 記念講演会** (聴講無料/当日受付先着順)
 日時●7月13日[土] 13:30~15:00
 演題●「近現代の備前陶芸一写しから創作へ」
 講師●唐澤昌宏氏 (東京国立近代美術館工芸課長)
 会場●講座室 (座席数84席)
- 日時●9月14日[土] 13:30~15:00
 演題●未定
 講師●森山悦乃氏 (公益財団法人 平木浮世絵財団主任学芸員)
 会場●講座室 (座席数84席)
- ◆スペシャルトーク**
 日時●7月14日[日] 14:00~15:10
 講師●伊勢崎淳氏 (国指定重要無形文化財「備前焼」の保持者、出品作家)
 伊勢崎晃一朗氏 (出品作家)
- ▲感性でたのしむトーク**
 日時●7月28日[日] 14:00~15:00
 講師●島村光氏 (岡山県指定重要無形文化財備前焼製作技術保持者、出品作家)

- 日時●8月4日[日] 14:00~15:00
 講師●金重有邦氏 (岡山県指定重要無形文化財備前焼製作技術保持者、出品作家)
- ギャラリー・ツアー** (担当学芸員による特別展示作品解説)
 いずれも11:00~12:00
 「The 備前 一土と炎から生まれる造形美」 ※テーマ別に作品を解説します。
 8月11日[日] 備前焼の歴史
 8月18日[日] 古備前
 8月25日[日] 近代の備前焼
 9月1日[日] 備前焼の現在
- 「にゃんとも猫だらけ」
 会期中の日曜日
- ギャラリー・トーク** (担当学芸員による普通展示作品解説)
 いずれも11:00~(30分程度)
 7月13日[土] 尾形月耕の美人画
 7月27日[土] 面取りのかたち
 8月10日[土] 恒久破壊 十三代三輪休雪(三輪和彦)の陶造形
 8月24日[土] 水野年方
 9月7日[土] 山口県と伝統工芸1 一漆工・染色・和紙一
 9月21日[土] 紅摺絵
- ※イベント詳細については美術館ホームページをご覧ください。
 ※スペシャルトーク、感性でたのしむトーク、ギャラリー・ツアー、ギャラリー・トークへの参加には観覧券が必要です。
 ※鑑賞バスツアー(旅行企画・実施) 防長交通株式会社
 山口県萩市大字平安古町553-1 TEL: 0838-22-3811 FAX: 0838-25-1258
 国内登録旅行業第2-41号 国内旅行業務取扱管理者: 藤崎友行 (担当: 禅院)

- 交通アクセス**
- 【新山口駅から】**
 ●直行バス「スーパーはぎ号」(約60分)で萩・明倫センター下車、徒歩約5分
 ●防長バス(約90分)で萩バスセンター下車、徒歩約12分
- 【山口宇部空港から】 萩・石見空港から**
 ●萩近鉄タクシー(乗合タクシー)約70~80分 (利用前日までに要予約)
- 【JR山陰本線】**
 ●JR萩駅から萩循環まあるバス(西回り)約30分
 ●JR東萩駅から萩循環まあるバス(東回り)約30分
 ●JR玉江駅から徒歩約20分
- 【自動車】**
 ●「中国自動車道」美祿東JCT経由、「小郡萩道路」検査ICから約20分
 ●「山陰自動車道」三見ICから約10分、国道191号沿い



山口県立萩美術館・浦上記念館
 HAGI URAGAMI MUSEUM
 〒758-0074 山口県萩市平安古町586-1
 TEL 0838-24-2400 FAX 0838-24-2401
 URL http://www.hum.pref.yamaguchi.lg.jp/

季刊「萩」令和元年7月15日通巻第92号
 発行/山口県立萩美術館・浦上記念館
 山口県萩市平安古町586-1

H A G I 萩

SUMMER ISSUE 2019
 92

題字は吉田松陰筆跡



金重陶陽《耳付水指》1958年 東京国立近代美術館蔵

備前焼のアイデンティティー

日本の各地にはやきものの産地が多く存在し、さまざまな表情のやきものが作られています。備前焼は、中世には、壺・甕・播鉢が生活に密着したやきものとして、また桃山時代には茶陶として人気の高いやきものでした。このように長い歴史をもち、現在もなお、作られ、使われ続ける備前焼の魅力とはどういったところにあるのでしょうか。



1



3

土と炎から生まれる造形美。

備前焼は、原料となる土の質感や、炎によって変化する表情におもしろみがあります。これは、もともと、やきものが出来上がるまでの過程で炎の作用により自然と表れたさまざまな痕跡でしたが、それが表現として取り入れられたという経緯があります。その画期が、桃山時代です。茶の湯の隆盛にともない、その場で使われる茶碗をはじめとする器は、古来のやきものの産地に大きな影響を与えるばかりでなく、あたらしい産地を生み出すほどの勢いがありました。備前焼でも花入や水指、茶入などが作られ、土と炎による表現で、他の産地にはない独特の存在感をもって数々の名品を生み出しました。

桃山時代の《矢筈口耳付水指》(写真1)は、口のつくりや底部のふくらみが、やや揺らぎながらめぐり、耳や蓋の摘みも型にはまった感じがなく自由に作られ、さらに、胴部には無造作に篋目(へらめ)が付けられています。しかし、それが全体の印象においては落ち着いた形となっているから不思議です。形、篋目に加え、目を引くのが色彩です。赤褐色の肌(こま)に胡麻の黄色、棧切(さんざり)の黒灰色と、一見モノトーンなリズムに



2

入ってくる窯変(ようへん)が生気を与えています。窯のなかでは、温度を上げるために焚かれた薪の灰が熱対流によって舞い上がり、やきものに降りかかります。それが、高温によって溶けて付着したものが「胡麻」と呼ばれ、「棧切」はやきものが薪灰に埋れるなどして還元状態となって現れます。これらは、炎とのかかわりでできた痕跡であり、備前焼独特の景色となっています。このほかにも、「牡丹餅」「緋襷」と呼ばれる景色があり、いずれも炎なくしては表現できない見所です。

ところで、そのような古い備前焼の研究を行って自身の作陶の基盤としているのが伊勢崎淳(いせざきじゆん)です。伊勢崎は、父・陽山(ようざん)、兄・満(みつる)とともに古い備前焼や窯の構造を研究し、宍窯(しやくよう)を築窯しました。宍窯は、桃山時代より古い時代に使われていたトンネル状の単室の窯で、それまで使われていた登り窯(いくつかの焼成室が連なった登り窯)と構造が異なります。そのため、やきものの出来も異なり、その復活は、桃山以前の備前焼へのまなざしとも言えます。このことは備前焼が長い歴史のなかで、土と炎を制作の主体として作り続けてきた一端を見せるようです。つまり、桃山、江戸と染付や色絵などが流行っていったなかでも、それ以前の備前焼に残された自然な痕跡が見所に取り上げられ、また、「備前焼中興の祖」と言われる近代作家、金重陶陽(かねしげとうよう)が注目したのはそのような桃山の備前焼でした。備前で作陶しようとする時、自らの特徴、また、原点に立ち返る、その姿勢がアイデンティティーを形成してきたのではないのでしょうか。

伊勢崎淳の《神々の器》(写真2)は、幅の広い縁状のつくりを持った器です。内底にはひとつの大きな牡丹餅状の白い抜けを作り、そのなかに緋襷が見え、炎からの恩恵を神に捧げるかのような供献(きょうけん)の器が完成しています。大きく迫力ある造形に加え、牡丹餅・緋襷・胡麻といった炎による表現は、器という型を超えてもアイデンティティーを継承できることを示しているようです。

炎による表現は、製作工程のなかで自然に生じた現象の痕跡です。自然な美しさには、真似できない部分がある。しかし、創作でもってそれを作品に表現することができたら…。

島村光(しまむらひかる)の《大割木香炉》(写真3)は、作家にとって身近な割木(薪)を主題にしています。一見、木材のように見えますが、窯焚きの際に使用する割木のなかから一番気に入ったものをとっておき、作品のモデルとしたと言います。形を、そのまま写しとるのではなく、島村が抽出した割木の特徴と、彼がとらえたその印象が巧みな篋使いで表現されています。さらに、興味深いのは、ベージュから赤茶色への見事なグラデーションです。窯の中のどこに、また、どのように置いたら思い描いたように仕上がるかを考慮してできたその色合いは、思うようにならない炎をわざにした瞬間をとどめるようです。

金重有邦(かねしげゆうほう)が作り出す形は、創作のなかにも、指先の動きにしたがって作り出される部分があると言います。たとえば、伊部茶碗(いんべちやわん) (写真4)の口縁の形や厚み、腰の張りなどの形は、茶碗で茶を点てる時、また、口にする時の使い心地と密接に関係があります。つまり、使い心地を左右するのは器の形であり、制作時に土の質感や状態にあわせて土を扱う指の力を加減し、造形的な美しさを守りながら使い心地の良さを目指す。その微妙な調整が金重有邦のわざ



4



5



6

であり、経験を重ね、土を熟知した指先が土と共鳴して美しい形が作られています。

備前焼は土と炎から生まれる造形をアイデンティティーとして受け継ぎながら、あたらしい道を時代時代で開拓してきました。本展覧会の出品作品のなかでも、あたらしい魅力を感じます。島村光《ネズミノカップル》(写真5)に見える篋目、隠崎隆一(かくれざきりゅういち)の混淆土(こんこうつち) (写真6)など、土であることの証が見所となるような趣向は、土を魅せるというソフトへの挑戦が結実しつつあることを見せるようです。

市来真澄(しらいまこと) (学芸課主任)

〈参考文献〉『The 備前 -土と炎から生まれる造形美-』
(2019年 NHKプラネット中部)

- 1 《矢筈口耳付水指》 桃山時代 16~17世紀 個人蔵
- 2 伊勢崎淳《神々の器》 2016年 個人蔵
- 3 島村 光《大割木香炉》 2012年 個人蔵
- 4 金重有邦《伊部茶碗》 2012年 グレンバラ美術館蔵
- 5 島村 光《ネズミノカップル》 1983年 個人蔵
- 6 隠崎隆一《混淆土器》 2016年 個人蔵

The Bizen From Earth and Fire, Exquisite Forms

The 備前

2019年 7月13日(土) ▶ 9月1日(日)

休館日 7月22日(月)、8月5日(月)、8月19日(月)
 開館時間 9時~17時(入場は16時30分まで)
 観覧料 一般 1,000(800)円、70歳以上の方・学生 800(600)円
 ※()内は前売りおよび20名以上の団体料金。
 ※18歳以下の方および高等学校、中等教育学校、特別支援学校の生徒は無料。
 ※身体障害者手帳、療育手帳、戦傷病者手帳、精神障害者保健福祉手帳の提示者とその介護者(1名)は無料。
 ※前売券は、ローソンチケット(Lコード62726)、セブンチケットでお求めになります。
 主催 備前展実行委員会(山口県立萩美術館・浦上記念館、毎日新聞社、tys テレビ山口)、NHKプラネット中国
 後援 山口県教育委員会、萩市、萩市教育委員会
 特別協力 エフエム山口

江戸時代の古備前の作品

源流としての備前焼 一茶の湯のうつわを中心に



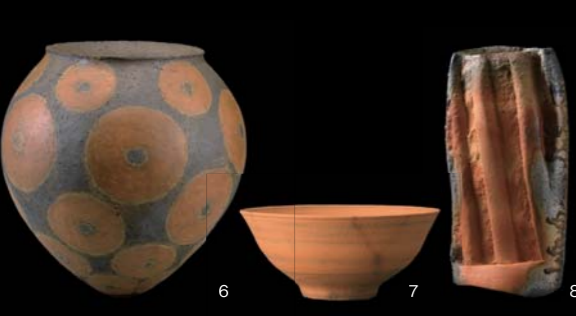
金重陶陽、藤原啓、藤原雄、伊勢崎清

近代の陶芸家と備前焼 一写しと創作一



伊勢崎淳、金重晃介、森陶隆一、矢部俊一、伊勢崎晃一朗

現代の備前焼 一表現と可能性一



1. 伊勢崎淳「神々の器」2016年 個人蔵 2. 「耳付花入 銘 太郎庵」桃山時代 16-17世紀 個人蔵 3. 「矢管口耳付水指」桃山時代 16-17世紀 個人蔵 4. 金重陶陽「耳付水指」1958年 東京国立近代美術館蔵 5. 山本陶秀「伊部手花入」1942年 個人蔵 6. 森陶岳「丸紋壺」1973年 茨城県陶芸美術館蔵 7. 金重有邦「伊部茶壺」2014年 グレンバラ美術館蔵 8. 伊勢崎晃一朗「打文花器」2018年 個人蔵

一土と炎から生まれる造形美一

備前焼は釉薬を施さず土と炎の造形から生まれるシンプルで原始的なやきものとして、古くから日本人に愛されてきました。「窯変」「緋袴」「牡丹餅」「胡麻」「棧切」など、薪窯による焼成で生まれた景色は他のやきものにはないみどころです。本展では桃山時代に茶人・数寄者によって見立てられた古備前の名品から、その古備前に魅せられ作陶に取り組んできた近代の作家、さらに先達から受け継いだ技術を生かして現代の備前を確立しようとする若手の作品まで、重要無形文化財保持者の作品も交えて、幅広くご紹介。シンプルでありながら、多彩な表現を生む備前の魅力を探ります。

イベントのご案内

- 1 記念講演会「近現代の備前陶芸一写しから創作へ」**
 ※聴講無料
 日時：7月13日(土) 13:30 ~ 15:00
 講師：唐澤昌宏氏(東京国立近代美術館工芸課長)
 会場：本館講座室(84席)
- 2 スペシャルトーク「備前焼の歴史と現在」** ※要観覧券
 日時：7月14日(日) 14:00 ~ 15:10
 講師：伊勢崎淳氏(国指定重要無形文化財「備前焼」の保持者、出品作家) 伊勢崎晃一朗氏(出品作家)
 会場：本館展示室2階
- 3 感性でたのしむトーク** ※要観覧券
 会場：本館2階展示室
 ①「Shocking Ware Bizen (衝撃的なやきもの)」
 日時：8月28日(日) 14:00 ~ 15:00
 講師：島村光氏(岡山県指定重要無形文化財備前焼製作技術保持者、出品作家)
 ②「触れて感じるやきものたのしみ」
 日時：8月4日(日) 14:00 ~ 15:00
 講師：金重有邦氏(岡山県指定重要無形文化財備前焼製作技術保持者、出品作家)
- 4 ギャラリー・ツアー** ※要観覧券
 担当学芸員によるテーマ別作品解説
 日時：8月11日(日・祝) 備前焼の歴史、8月18日(日) 古備前 8月25日(日) 近代の備前焼、9月1日(日) 備前焼の現在
 いずれも11:00 ~ 12:00
 会場：本館2階展示室
- 5 鑑賞バスツアー**
 山口市を発着、萩焼・深川の里(長門市)の古窯と窯元を学芸員と巡り展覧会を鑑賞します。
 実施日：8月17日(土)
 定員：23名 [最小催行人数：5名]
 参加費(昼食代含む、観覧料別途)：一般 3,000円 [メンバーズ会員 2,500円]
 (旅行企画・実施) 防長交通株式会社
 山口県萩市大字平安古町 553-1 TEL: 0838-22-3811 FAX: 0838-25-1258
 国内登録旅行業第 2-41 号 国内旅行業務取扱管理者：藤崎友行(担当：禅院)
- 6 アート・フェスティバル 2019**
 恒例の人気アートイベントを会期中に開催。展覧会に関連したワークショップもあります。
 開催日：8月11日(日・祝)

にゃんととも猫だらけ



豊原国周「東けい三十六会席 柳ばしそめ」大判錦絵、明治3年(1870)



歌川芳藤「五十三次之内猫之怪」大判錦絵、嘉永期(1848-54)



歌川国利「しん板ねこの世界」大判錦絵、明治19年(1886)

作品はすべて公益財団法人 平木浮世絵財団蔵 作品はすべて半期展示

中国から渡来し、唐猫と呼ばれ貴族たちに愛玩されて以来、猫はさまざまな文芸や絵画に取り上げられてきました。江戸時代になると一般でも猫が飼われるようになり、猫は庶民にとっても身近な存在になっていきます。人々に可愛がられた猫は、浮世絵版画にも多く描かれ、女性と戯れる日常の姿、時には擬人化された姿で人々を楽しませました。本当は恐ろしいはずの化け猫もどこか愛嬌があって憎めません。

本展覧会は、そんな浮世絵版画的猫たちを、近年の猫美術展ブームの火付け役でもある平木コレクションによってご紹介するものです。2015年にニューヨークでも開催され大好評を博した展覧会が、出品点数を増やした拡大版で萩にやってきます。猫好きで知られる歌川国芳をはじめ、さまざまな絵師たちの描く猫をお楽しみください。

2019年 9月14日[土]~11月17日[日]

パートI 9月14日[土]~10月14日[月・祝] **すべての作品も展示替えします**
 パートII 10月18日[金]~11月17日[日]

休館日 9月30日[月]、10月15日[火]、16日[水]、17日[木]、28日[月]、11月11日[月]
 開館時間 9:00~17:00 (入場は16:30まで)
 観覧料 一般 1,000(800)円、70歳以上・学生 800(600)円
 にゃん券(ローソンチケット、セブンチケットでのお得な2回券) 1,500円

※()内は前売りおよび20名以上の団体料金。
 ※18歳以下と高等学校・中等教育学校・特別支援学校の生徒は無料。
 ※身体障害者手帳、療育手帳、戦傷病者手帳、精神障害者保健福祉手帳をご提示の方とその介護者(1名)は無料。

主催 にゃんととも猫だらけ展実行委員会(山口県立萩美術館・浦上記念館、読売新聞社、KRY山口放送)
 後援 山口県教育委員会、萩市、萩市教育委員会
 協力 公益財団法人 平木浮世絵財団

関連イベント

記念講演会やその他のイベントについては、決まり次第、当館ホームページ(<http://www.hum.pref.yamaguchi.lg.jp/>)や本展覧会チラシなどでご案内いたします。



桑田卓郎

Dear Tea Bowl,
Horsetails are in season in Hagi.

2019年4月2日(火) — 2020年3月15日(日)



撮影：武田陽介

Dear Tea Bowl, Horsetails are in season in Hagi.

—— 桑田卓郎の創造的侵犯力

桑田卓郎の作品には「過剰」があふれている。もっとも、この過剰という概念で導かれるかれの作品の魅力は、眩惑的な配色や金属質の彩りをはじめ、磁胎^{じたい}でありながらまるで土物^{つちもの}（陶胎^{とうたい}）かと思わせるほどに傾き歪んだ姿をも含むかたちの奔放さ、さらにはもはや梅華皮^{かいらぎ}とは呼べないほどに激しく垂れ下がった釉^{ゆう}や石爆^{いしは}ぜで見せる感触の複雑性など、外装におけるバサラ（婆娑羅）的な放埒性がまず目を惹くが、そればかりでない。むしろ、美術（絵画や彫刻）と工芸をジャンル分けしてきたような近代の分節的造形観（西洋芸術観）に向けて、強烈な侵犯力を備えた、可能性に満ちた創造力の内実にある。

近代の画家や彫刻家たちは、自らの制作の結果である作品が工芸的だと評されることを恥辱としてきた。かれらは、作品を単なる造形物としてではなく、尊重されるべき制作者の統合された個としての自律的表現であり、場所や状況に従属するはずのない自由意思と等しい存在と理解していたからだ。つまり、発想から完成に到るまで他者を介在させることなく一人が制作（あるいは、制作を主導）することを前提とした、真正なる個性の発露と捉えていたのだ。そんなかれらにとって、工芸というジャンルは、たとえ緻密な設計と精巧な技術に基づくとしても、

素材づくりから仕上げまでの複雑な工程を分業でおこなう手工業的な生産態勢に依拠していること、また実用目的に適合するようかたちの構築に自己規制が強られること、さらにその日常性ゆえに純粋な鑑賞対象とはなり得ないことなどを根拠に、機械化工業に取り残されてしまった前近代的製造方法にしがみつくと、単純な工作物と認識していた。それゆえに、近代精神の自律的営為と信じる自らの作品が工芸と同一視されることは、かれらにとっては悪夢以外の何ものでもなかったのだ。

19世紀半ばに黎明期を迎えた近代日本が西欧から取り込んだ、このような分節的芸術観によって捉えられてきた工芸への偏見は、さすがにいまは分業的生産態勢などとはいわなくなつてはきたが、残念ながらさほどの改善もなされず、一般はおろかその作り手たちにも浸透してしまっている。もっとも、この150年間のうちには、1920年代の大正アヴァンギャルドや1960年代の「反芸術」運動の経験をとおして、絵画や彫刻といったジャンルに芸術活動を展開する工芸家たちも現れ、どうにか明治期の画家や彫刻家たちのような固陋から脱却しつつあるようにも思えなくもない。しかしながら、「絵画、彫刻、建築、装飾、そして工芸は、モダニズムの下、今一度、共通の様式へと収斂した」ⁱと、グリーンバーグが

20世紀半ばに望見した未来志向的な現代美術の規準は、現況を見渡す限り実感としてはまだ遠い。

桑田による今回の茶室展示は、かれの作品だけを大量にインスタレーションすることで、茶の湯の定式的な室礼から逸脱したバサラの装飾性の過剰を見せつけ、四畳半茶室の空間性を静的な陰翳から動的な気色へと転換させている。この賑々しい祝祭性を感じさせる布置結構じたい、破格を愉しんだ寄合的パフォーマンスの狂騒を想起させ、近世以降の茶の湯における侘数寄・侘茶の形式美を先取った、中世の茶寄合や茶数寄の気配や美感を匂わせるじつにユニークな手法だが、かれはこれまでも、作り手と素材や技術との必然的な関わりを通して陶芸の文化や歴史について考察を深め、それを自らの造形性において戦略的に展開してきた。

一体に陶芸とその隣接領域の文化的伝統性は、桑田の表現にとってのメタ媒体であり、造形性の分裂（かたちの背後にある理想化された概念と、それをかたちでは達成できないことまで）を、強調して表現するために用いられているようだ。

たとえば、「形」「比」「様子」といった概念を基準に、姿や重量・体積、質感・釉調・貫入（釉のひび割れ）・露胎部の土味などで評価されてきた、茶碗の理想化モデルの一つに桃山陶器の志野があるとすれば、かれは日本陶芸の古典と見做されてきたその造形的特徴（見所）を、要素還元的に解体・分析したうえで、作陶の伝統的秩序に則ってそれらの要素を選択し、採否したり置き換えたりする操作を加えながら、現代的視点から統合して一つのかたちに再構築していく。その結果として、かれ独自のかたちが成立するのだが、それは、茶の湯の道具としての茶碗の規範性（スタンダード）をわざと逸らし、志野の見所の厚く施された長石釉の

ひび割れを、芸術表現のレベルでさらに純化させて、それを外装性（「様子」）の前景に据えた、作品としての茶碗だ。

桑田はここで、志野の美質が、長石釉のひび割れに収斂されてしまうことをかたちのバサラ的過剰さのうちに強調しつつ、現代に古典的なそれを再現し得るかたちの困難を暗示する。自らが咀嚼して表現した逸脱のかたちにもその輝きが失われることはない、本歌としての桃山陶の志野への賛辞とともに。

ところで、言葉の意味分節的エネルギーによって細分された数多の事物や事象が、それぞれに「名」を得ることで固定され、表層意識に「現実」を見せ、その現実が「整然たる存在秩序において現出」することを「現象」というⁱⁱ。つまり現象とはいまの世界であるが、美術との造形表現の領域のそれも、先述のように閉塞感がただよっている。この現況をいったん、混然として捉えどころのないようなカオスの状態、すなわち事物・事象の名辞以前の初源に引き戻し、その豊饒の母胎から再び一つの高みを構築しようとする過剰なバサラ的侵犯力こそ、現在には必要ではないだろうか。

「全てのものが混融する存在昏迷。いずれがいずれとも識別されず、どこにも分割線の引かれていない、混然として捉えどころのないようなあり方ⁱⁱⁱ」という、カオスの状態から、統合された個としての自律的表現で新たな世界を伸び上げる、桑田の創造力はじつに魅力的に映る。

石崎泰之（副館長）

i C.グリーンバーグ「新しい彫刻」（1949年/1958年）、『グリーンバーグ 評論選集』、藤枝見雄編訳、勁草書房、2005年、p.108

ii 井筒俊彦「意味の深みへ」、岩波文庫、2019年、pp.312-313

iii 前掲書、p.309

（本稿は桑田卓郎の茶室展示リーフレットの再掲です。）



おがたげっこう 尾形月耕の美人画

普通展示(浮世絵)

令和元年(2019)7月9日(火)～8月4日(日)

尾形月耕(1859～1920)は、独学で絵を学び、新聞の挿絵や洋装本の表紙や口絵など明治の新しい大衆メディアだけでなく、展覧会や博覧会に肉筆画を出品、審査員としても活躍しました。錦絵では日本画風の美人画シリーズを次々と発表し、浮世絵版画の最期を飾りました。



花美人名所合 亀戸龍眼寺の萩 大判錦絵3枚続 明治28年(1895)

みずのとしかた 水野年方

普通展示(浮世絵)

令和元年(2019)8月6日(火)～9月8日(日)

水野年方(1866～1908)は、月岡芳年(1839～92)の門人で、新聞の挿絵画家として人気を博し、錦絵の最期にあたる明治30年代(1897～1906)末まで、尾形月耕と競い合うようにして美人画のシリーズを制作しました。また、かぶらききよかた(1878～1972)をはじめとする多くの門人を育て、浮世絵の流れを次世代の日本画へと結び合わせたことも年方の功績です。



今様美人 九 横大判錦絵 明治32年(1899)

べにずりえ 紅摺絵

普通展示(浮世絵)

令和元年(2019)9月14日(土)～10月14日(月・祝)

浮世絵版画が誕生してから、しばらくの間は、筆で彩色をしていました。

寛保～延享期(1741～48)から、版による彩色が行われ、それらをべにずりえにしろえという多色摺の高度な技術が完成するまでの間、紅摺絵は主力な商品として流通しました。

今回は貴重な初期の作品から、錦絵に主流を譲るまでの作品を展示します。紅摺絵の素朴で温かみのある色あいをお楽しみください。



奥村政信 草子洗小町 横大判紅摺絵 寛保～延享(1741～48)期

面取りのかたち

普通展示(東洋陶磁)

令和元年(2019)7月9日(火)～10月14日(月・祝)

やきものを原土から作り上げる時、回転するロクロからひきあげられた基本的な形は円形、あるいは球形となります。そこから四角や、さらなる多角形の造形を得ようとするには、四方を切り落とす、板を型として作った土片を貼り合わせる、型にはめる、工具を当てて形を変えるなど、更なる加工が必要となってきます。やきものを数多く作るためにはロクロでひいたままの円形・球形がより効率的(日常生活で円形のお皿やお茶碗をよく目にします)ですが、ひと手間を加えることが鋭い造形を生み出します。

こうした加工によって面をつけたやきものは中国・朝鮮・日本などでは古くから行われており、その造形は角皿・角鉢・角瓶・枕・水指・陶管など多岐にわたります。様々な時代と国の陶工、陶芸家の技巧が光る、面のやきものの数々をお楽しみください。



坂高麗左衛門(12代) 陶彩景秋草団八角陶宮 2002年

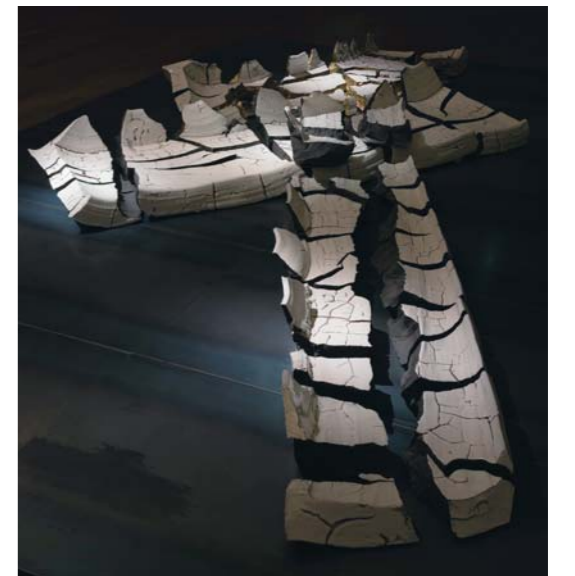
こうきゅうはかい みわきゅうせつ かずひこ 恒久破壊—十三代三輪休雪(三輪和彦)の陶造形

普通展示(陶芸)

令和元年(2019)7月9日(火)～11月17日(日)

現在、私たちの生活の営みの中で、大地との交流の象徴であった土への知覚が遠のく中、陶芸家は常に土という素材に真摯に向き合ってきました。三輪壽雪(十一代休雪)の三男に生まれ、兄三輪龍氣生(十二代休雪)の跡を承けて襲名した十三代三輪休雪(本名・和彦)は、400年の歴史を持つ萩で作陶しながらも、常にそうした土の生の主張を聞き続け、素材である土と対峙し、その鋭敏な感性と強靱な身体能力を駆使して、これまでにないスケールの大きな陶の造形を生み出してきました。

今回ご紹介する《恒久破壊I》(1987年)と連作《Untitled '88》の4作品(1988年)は、十三代休雪が自らの身体を使って土と交わり格闘し続けた生きた証であり、土が根源的に秘めているエネルギーを最大限に引き出したこれらの作品から、改めて土への覚醒と陶芸に内在する限りない表現の可能性を提示するものです。



十三代三輪休雪(三輪和彦)《恒久破壊I》1987年

山口県と伝統工芸1—漆工・染色・和紙—

普通展示(工芸)

令和元年(2019)7月9日(火)～9月8日(日)

実用に供するものが巧みに作られ、使い心地の良いものであったら。その期待に沿っているのが工芸です。受け継がれるなかで洗練されてきたわざを活かして、美的にも機能的にも優れているものが日本の各地で作られています。

本展覧会では二回にわたって、山口県にゆかりのある伝統的なわざで紹介された工芸を紹介していきます。今回は、漆工・染色・和紙です。



俵山美知子 菊薔箱「半 Willow」 2014年 幅26.0×奥行34.5×高7.5cm